

第八章 山車のお囃子

第一節 囃子について

(一) 囃子とは

囃子とは、映えるようにする、引き立たせる意の「はやす」が転じて名詞化したものである。演技や主奏音楽を引き立たせ賑やかにするための伴奏についていうほか、その音楽（楽曲）そのものを指す場合もある。祭礼では獅子舞や巫女舞、山車などに付随して行う楽器の演奏を囃子（お囃子）と呼び、さらに楽曲のジャンルや楽曲そのものの、また演奏する者をそう呼ぶこともある。例えば、「山車囃子（ジャンルのこと）の〇〇囃子という曲」といった具合である。

(二) 東海地方の山車と囃子の機能

東海地方の山車祭礼は中世の大山・ダンジリ文化まで遡ることが出来る。本来、山車は神の依り代であり、その神を常時囃して送り迎えるための装置が別に必要とされた。東海地方では前者を大山、後者をダンジリと呼び、セットで曳き出していた。大山では人形芸能が行われ、ダンジリでは笛・太鼓・小鼓等の演奏と共に稚児による鞆鼓舞や扇獅子が舞われた。現存数は少ないが岐阜県域では垂井町の南宮大社、美濃市大矢田の大矢田神社等でその名残を見ることが出来る。その後、近世になるとカラクリ人形を搭載した山車が発達した。特に名古屋城下で発達した名古屋型の山車は各地に影響を与え、現在も多く地域で曳かれている。それらの山車では囃子の演奏者（「囃子方」）が内部に乗り込み、道中曲やカラクリ演技用の曲を演奏する。「囃されるもの（依り代）」と「囃すもの」という関係は中世の大山・ダンジリと比べると明確ではないが、山車

が動いている間に絶え間なく演奏を続けるという意識は今もなお残っている。一般にそういった山車の囃子は、神社へ向かう曲、宮入の曲、神社からの帰路の曲など曳行の場面ごとに複数の曲が使い分けられており、神前での奉納曲（カラクリ演技を伴わない場合もある）を演奏する場合もある。

第二節 岐阜まつりの囃子の特色

岐阜まつりでは囃子演奏を伴う四台の山車が曳き出される。それらのうち三台（「安宅車」^{あたかしや}「若戎車」^{わかにびすしや}「清影車」^{せいえいしや}）が屋根付きの名古屋型山車で、他一台（「踊車」^{おどりしや}）は作り物を載せた露天の山車である。明治期以降に制作された山車もあるが、形式としては少なくとも江戸時代後期には伊奈波神社の氏子地域で取り入れられていたものである。

名古屋型山車とは江戸時代に名古屋城下を中心として発達した形式の山車で、愛知県は勿論のこと、尾張藩領が存在した岐阜県内にも多く分布している。それらの山車では上山にカラクリ人形を搭載し、神前等で奉芸が行われる。そのカラクリには能楽を題材にした演目が好まれたことから、それに合わせる囃子も能楽を原曲とするものが多い。岐阜まつりの三台についても同様で、曳行時やカラクリの演技時には能楽系の囃子を演奏している。また、詳しくは後述するが愛知県域とは違い、岐阜県域ではカラクリ演技時に謡曲が入るという特徴がある。

一方、「踊車」は本来「手踊り」が付随する山車で、現在曳かれている一台は作り物を飾るのみで手踊りは行われないが、道中では「三味線の神楽」と呼ばれる三味線付きの曲が演奏され、手踊りとの関わりをうかがわせる。また、踊車でも能楽系囃子が演奏されており、岐阜まつり全体の土台として能楽系囃



昭和中期まで各山車は囃子演奏も含めて特定の町内によって運営されていたようで、その後は複数の町内によって組織される「地区」や、町内に属さない特定の団体へと引き継がれた。地区による担当の場合は細分化された「区」による輪番制になっている場合もある。現在、若戎車は明郷校区（岐阜若戎車奉曳会）、踊車はボーイスカウト岐阜第十六団がそれぞれ毎年担当している。他二台は輪番制となっており、安宅車は金華地区の全十六区から二区ずつが輪番で担当（八年周期）、清影車は京町地区の七区が六年周期で担当している（第五・六区は合同）。近年では人口減少のため担当区以外からの参加者も増えている。

第三節 囃子の担い手

子が浸透していることが分かる。

各山車では複数曲の囃子を伝えており、それらは道中曲とカラクリ曲（人形囃子）に大きく分類され、さらに道中曲は昼の道中や夜の道中、山車回転時、帰路など場面ごとに細かく使い分けられている。それらの囃子は氏子によって笛・小太鼓・大太鼓・小鼓・鉦等を用いて演奏されるが、衰退した時期を経てテープ音源を併用している山車（「清影車」「踊車」）もある。若戎車については長らくテープ音源を使用していたが、近年になってから氏子らの努力によって完全な生演奏が復活し、新たな曲も取り入れつつ囃子の伝承が行われている。

表 8-1 演奏者の年齢層

山車名	楽器	笛	小太鼓	大太鼓	小鼓
安宅車		制限なし	小学1～6年生	制限なし	制限なし
若戎車		大人	小学生～大学生	高校生・大学生	小学生～大学生
清影車		制限なし	小学1～6年生	小学3～6年生	
踊車		高校2年生 大人	小学3～5年生	小学3～5年生	

囃子方の年齢層は子供から大人まで幅広いが、小太鼓については各山車とも主に小学生が担当することになっており、清影車では未就学児を対象にする場合もある（表 8-1）。

第四節 楽器と奏法

（一）囃子に使用される楽器

岐阜まつりの囃子は笛（能管・篠笛）・小太鼓・大太鼓、鉦等の楽器を使って演奏される（表 8-2）。能管を用いる楽曲は能楽系囃子に分類されるが、正式な能楽での楽器構成が笛・太鼓・小鼓・大鼓であるのに対し、山車囃子では笛・太鼓・小鼓・大太鼓となっている。これは岐阜まつりに限らず愛知・岐阜の能楽系山車囃子では一般的である。また、近年になってから取り入れられた若戎車の「七軒町」「おぼは」では篠笛が用いられ、踊車では実演されないものの三味線の演奏が収録された音源を使用しており、使用する楽器は多様である。各山車とも演奏で用いる楽器のうち大太鼓は一丁、小太鼓は三丁と決まっており、他の楽器は参加人員や場面によってその数が増減する。

（二）笛について

1 能管

岐阜祭まつりに参加する四台全ての山車で能管が用いられている（呼び名は「笛」「お笛」「能管」等）。能管は能楽で用いられる笛で、能楽の影響を受けた祭礼囃子でも取り入れられている。外観は龍笛に近いが管内に「喉」と呼ばれる構造を持ち、特殊な音階になっている。若戎車・清影車・踊車では長らく笛の演奏が中断していたが、復活に際してプラスチック製の能管を新調している。

表 8-2 各山車の囃子で使用する楽器

山車の名称 (地区・団体名)	曲名	笛 (能管)	小太鼓	大太鼓	小鼓	鉦	謡	三味線	備考
安宅車 (金華地区)	道行	○	○	○	○				
	早神楽	○	○	○	○				
	車切	○	○	○	○				
	狂言神楽	○	○	○	○				
	三番叟	○	○	○	○				
	人形囃子	○			○		○		
若戎車 (明德地区)	車喜利	○	○	○	○				
	早車喜利	○	○	○	○				
	狂言鞆鼓	○	○	○	○				
	狂言神楽	○	○	○	○				
	三番叟	○		○	○				
	神楽	○	○	○	○				
	早神楽	○	○	○	○				
	七間町	○(篠笛)	○	○	○	○			
	おばば	○(篠笛)	○	○	○	○			唄が付く
	人形囃子	○	○		○		○		
清影車 (京町地区)	道行	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	しゃぎり	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	三番叟	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	人形囃子	(○)	(○)						CD音源のみ
踊車 (ボーイスカウト 岐阜第16団)	車切	○	○	○					
	三味線の神楽		○	○				(○)	CD音源を併用
	下り村	○	○	○					
	神楽	○	○	○					

(○) はCDに収録されているが実演はしていない楽器

表 8-3 笛の寸法

(単位はmm)

寸法 笛・山車		全長	唄口(管尻側)から各指孔の管頭側及び管尻までの距離								唄口径	指孔径 (第1孔)	管尻 内径
			第1孔	第2孔	第3孔	第4孔	第5孔	第6孔	第7孔	管尻			
能管	安宅車(*1)	388	100	125	148	170	190	209	227	268	16×14	11×9	12
	若戎車(*2)	396	100	127	150	172	182	210	229	275	17×9	10×7	12
篠笛(古典8本調子) 若戎車		401	123	147	171	186	216	245	267	336	14×7	9×7	11

*1) 個人所有(輪宝の頭金) *2) プラスチック管



若戎車では奉曳会所有（平成二十七年（二〇一五）新調）、清影車ではからくり保存会所有（平成二十三年（二〇一一）新調）、踊車ではボイスカウト所有（平成十二年（二〇〇〇）新調）となっており参加者に貸し出している。

安宅車には地区所有のプラスチック管の他、古くから伝わる竹製の能管（個人所有）が残されている。その管の管頭には「輪宝」をかたどった金具がはめ込まれており、これは安宅車の飾り金具と同じ意匠である。輪宝は仏教において煩惱を打ち砕く象徴とされており、山伏が首からかける袈裟に金具として取り付けられることがある。安宅車では演者（カラクリ人形）が山伏に扮することから輪宝が意匠として採用されたのであろう。



写真 8-2 輪宝の頭金（安宅車）



写真 8-1 横笛（上から安宅車の能管、若戎車の篠笛・能管）

2 篠笛

若戎車では帰路（夜）で演奏される「七軒町」「おぼば」に唄用八本調子の篠笛（七穴）を用いている。これは日野屋楽器（名古屋市）製で、邦楽関係で広く普及している鳳声管の寸法に合わせて特注で製管されている。材質は白竹に篠の天地巻きである。近年まで岐阜まつりでは篠笛が使用されていなかったが若戎車では楽曲の導入に併せて用いるようになった（平成二十八年（二〇一六）より）。近隣の美濃まつり（美濃市）や関まつり（関市）など、夜（帰路）の囃子曲に篠笛を用いる例はいくつか存在する。

（三）打楽器について

1 大太鼓

各山車とも大太鼓として鋳打ちの平太鼓を用いている（呼び名は全山車で「大太鼓」。直径は60cm前後と大型で、吊り下げて専用のバチで打つ。バチは先端にフェルトや布が巻かれて太くになっており、大きく柔らかい音が出るようになっている。岐阜県や愛知県の山車囃子ではこの形態が一般的である。なお、踊車では太鼓台ごと山車内に載せ、他三台は車体に直接吊り下げている（図3）。各山車の大太鼓については以下の通りである。

安宅車の大太鼓は山車と共に車之町（本町五丁目）から伝わったとされるもので、吊り台（稽古時使用）には「伊奈波神社祭典山車奉曳記念 大太鼓台」と墨書きされている。

若戎車の大太鼓は囃子が復活した平成二十六年（二〇一四）に新調（宮本卯之助商店製）されたものである。

清影車の大太鼓胴回りには「清影車」と墨書きされており、収納箱には「（側面①）紀元二五三三年 明治二年癸酉一月新造」「（側面②）紀元 明治三年酉一月新造」「（側面③）清影車 要具 大太鼓入篋 中之切」「（蓋裏面）玉井



写真 8-3 山車内の大太鼓（安宅車、車体後方より撮影）

町「所蔵」と墨書きされている。年号にばらつきがあるが、紀元二五三三年の干支が癸酉であることを考慮すると、明治六年（一八七三）に大太鼓が造られたと考えてよさそうである。清影車の由来が刻まれた木板によれば、玉井町では明治六年に獨立山車を新造したが濃尾震災により焼失し、その後、明治三十七年（一九〇四）に元濱町・港町と合同で清影車を新造したとあるから、先代の山車と共に大太鼓が新調されたのかもしれない。

踊車の大太鼓を収納する木箱には「祭典用太鼓 小熊町」「昭和十一年四月新調 太鼓師 三重縣桑名郡深谷村 阿部甚兵衛 幹旋人 尾関次口」とあり、昭和四十年代まで踊車を曳いていた小熊町から伝わったようである。

2 小太鼓

各山車とも小太鼓として紐締め座敷太鼓が用いられている（図4、呼び名は「太鼓」縮

表 8-4 打楽器の寸法

（単位はmm）

楽器名	計測部位	安宅車	若戎車	清影車	踊車
小太鼓	打面直径	342	350	345	340
	胴長	137	135	160	150
	バチ全長	未計測	330	330	未計測
	バチ太さ	未計測	25	25	未計測
大太鼓	打面直径	660	610	550	570
	胴長	320	250	200	205
	バチ全長	280	375	340	310
	バチ手元太さ	30	25	25	35
	バチ手先太さ	60	80	60	70
小鼓	面直径	204	200		
	胴長	252	257		
鉦	高さ		38		
	上部直径		135		
	下部直径		165		



め太鼓」等）。安宅車では指導者が所有、若戎車では奉曳会が所有、清影車では地区所有のものとカラクリ保存会所有のものがある。踊車では裏面に「シ（おそらく神振会のシ）」と墨書きされた革が二枚（太鼓一丁分）伝わっており、足りない革や胴は安宅車の関係者から借りている。安宅車や若戎車では能楽太鼓の刻みのように弱打で打面を少し押さえるように打つ。また、各山車とも曲によっては左バチを担ぐ動作が入る。

3 小鼓

安宅車と若戎車では小鼓が用いられる（図5、呼び名は「鼓」「小鼓」等）。京町地区出身者の話では清影車でも以前は小鼓の演奏があったようだが、現在は楽器も含めて残っていない。

4 鉦

若戎車では帰路（夜）で演奏される「七軒町」「おぼば」に鉦（呼び名は「当たり鉦」）を用いている。名古屋方面の文化を意識して取り入れたとのことである。唱歌に「チキ



写真 8-5 小鼓（安宅車）



写真 8-4 小太鼓（踊車）

チ」「コンコン」とあるように、演奏では撞木を使って鉦の内側の側面や打面を打つ。

（四）楽器ごとの演奏者数や配置について

各山車に乗車する囃子方の人数は表8-5の通りである。各山車とも小太鼓（三名）と大太鼓（二名）は固定だが、それ以外のバートについては厳密に人数制限をしていない場合もあり、多少増減することがある。

配置については大太鼓を車体左前方で演奏する点が四台に共通している他、山車後部に小太鼓奏者が外向きに並ぶ点が三台（安宅車・清影車・踊車）に共通している（写真8-6）。詳しくは第七節で述べるが、この小太鼓の配置は岐阜市・美濃市・関市周辺の山車にだけ見られる特徴である。金屋町（明徳地区）出身者によれば若戎車でもかつては後部に小太鼓奏者が三人並んで演奏をしていたらしく、その名残で床が後部に突き出している。

安宅車では、笛（六名、うち二名は指導者で他四名は担当地区出身者）、小鼓（四名、うち二名は熟練者で他二名は担当地区出身者）が乗り込み、山車後方にマイクを設置している関係で指導者や熟練者はその近くになるように座っている（図8-1）。また総指揮をする指導者は山車の外（後方）で指示を出し、曳行中に小太鼓奏者（小学生）の交代を行う。

表 8-5 囃子方の乗車人数（令和6年）

単位：人

	笛	小太鼓	大太鼓	小鼓	合計
安宅車	6	3	1	4	14
若戎車	4	3	1	4	12
清影車	1	3 (+6)	1		11
踊車	3	3 (+α)	1		7 (+α)

若戎車では、太鼓三名が山車の左右に二名対一名で向かい合い、笛は山車前方側に乗る（図8-2）。また小鼓は山車後方に外向きで腰掛けるようにして座る。これらは名古屋の山車文化を模している（写真8-7）。笛・太鼓ともに指導者が乗っていて、曲の切り替えなどの指示をしている。また、カラクリ演技を披露する際は、笛・小太鼓・小鼓・鉦の奏者は山車の前に並んで演奏を行う。スペースの制限がないため使用する楽器は小太鼓が六丁、小鼓が八丁で、笛も大勢で演奏をする。

清影車では、小太鼓奏者の後ろに六名ほど待機しており、その横には指導者が同乗して曳行中に交代の指示を出している（図8-3）。笛は現状では一名で、休憩を挟みながらCD音源に合わせて演奏をしている（令和六年時点）。



写真 8-7 若戎車の小鼓奏者（車体後方より撮影）



写真 8-6 安宅車の小太鼓奏者（車体後方より撮影）

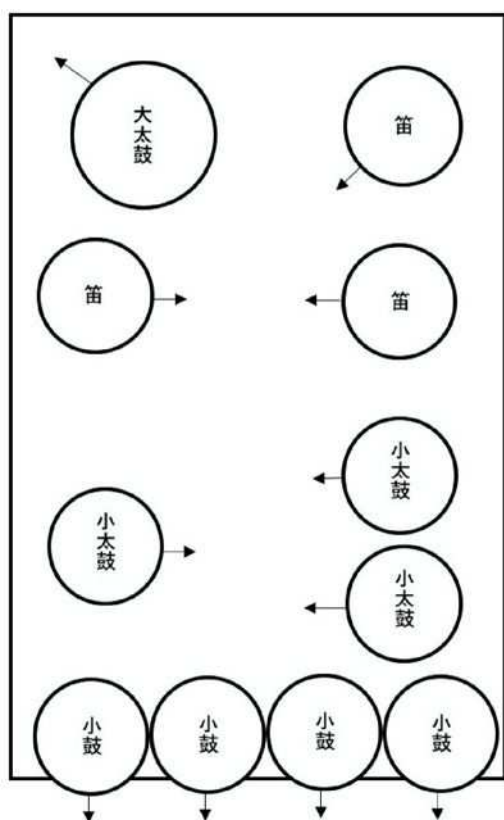


図 8-2 囃子方の配置（若戎車）

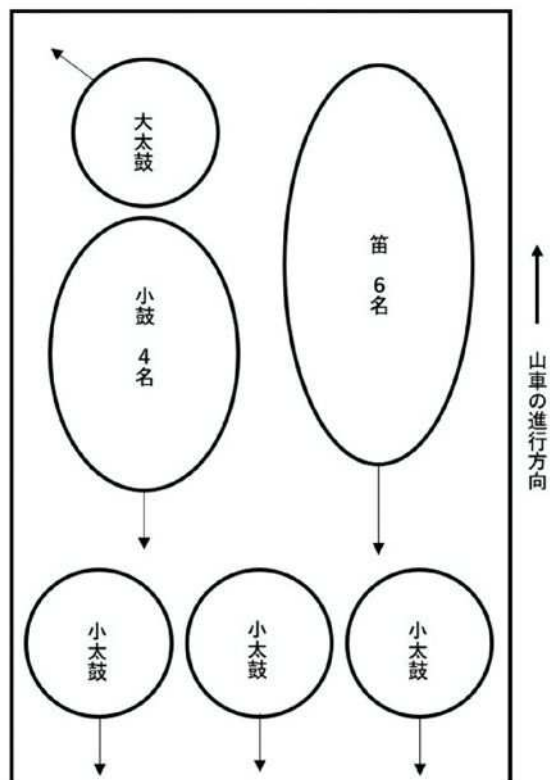


図 8-1 囃子方の配置（安宅車）

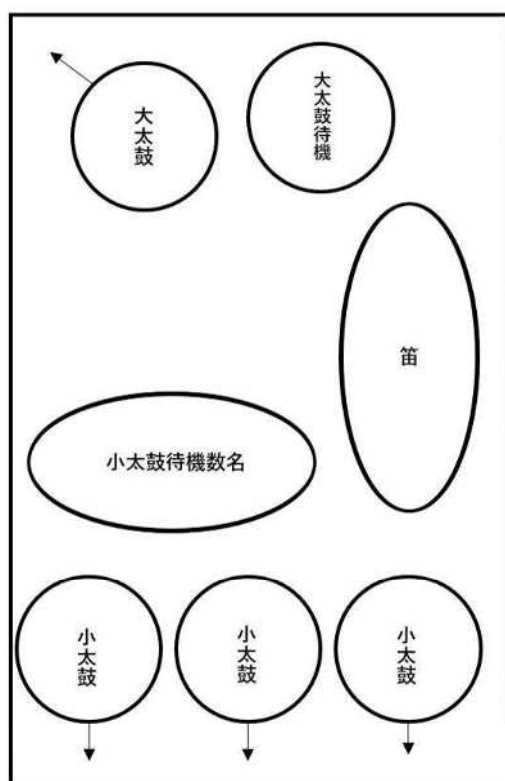


図 8-4 囃子方の配置（囃子車）

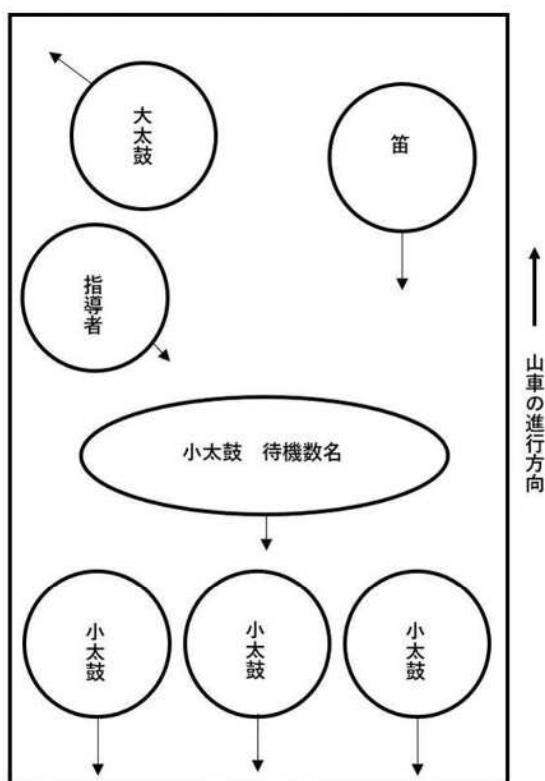


図 8-3 囃子方の配置（清影車）

囃子車では小太鼓奏者の後ろに数名待機しており、その後ろに笛奏者（うち一名は指導者）が座る（図 8-4）。音響機器の調整は笛奏者が担当している。

第五節 稽古と楽譜

各山車では岐阜まつりの時期が近くなると地区や団体主催で囃子の稽古が開催される。回数や期間はそれぞれ異なっており、五回程度の場合もあれば二十回以上開催する場合もある。複数の地区が年ごとに輪番で囃子を担当するケースもあり、安宅車は八年周期、清影車は六年周期で担当が回ってくることになっている。しかしながら、どの地区も指導者や主要メンバーは輪番とは関係なく毎年携わっており、安定して囃子が伝承されている。

どの山車も稽古に八割譜が用いられている。八割譜とは能楽で用いられる楽譜のことで、笛のメロディや打楽器の手付けが八拍を一行として表記されている。笛は「オヒヤラ」というような唱歌に加え、運指を数字表記した数字譜も併用されている。どのパートも最終的には暗譜をした上で山車に乗車するため基本的に祭礼当日は楽譜を用いないが、稽古の補助としては役立っている（写真 8-17～29）。

若戎車では文化庁の補助事業で「奉曳資料集 第一集 山車囃子（令和四年発行）」という譜面集を刊行している。指導者である小野崎隆賢氏を中心となつて編集されたもので、楽器ごとの八割譜の他、囃子復活のいきさつや、各曲の由来等が詳しく解説されている。他山車についても印刷されたものを配布したり、拡大したものを稽古場に掲示するなどの方法で活用している。

（一）安宅車の稽古



写真 8-8 稽古風景（安宅車）

安宅車では金華地区内の十六区が二区ごとの輪番で囃子方を担当しており、稽古はどの年も金華公民館で行われる（写真8-8）。スケジュールは年によって多少変動するが、一月から笛・大太鼓の稽古があり、二月になると太鼓・小鼓の稽古が始まる。そして、三月になると全体での稽古が行われ、祭礼当日と同様に曲の切り替えなども含めて調整をする。パート別の稽古も含めると三十回近くの開催になる。小太鼓・小鼓の指導は能楽幸清流小鼓方の後藤嘉津幸氏

（金華地区）が中心となっており、われ、他楽器も金華地区在住者によって指導されている。

令和五年三月二十七日の合同稽古では、初めに昼の道中進行で用いる「道行」と「車切」を交互に演奏し、休憩を挟んで、夜の道中進行で用いる「早神楽」と「車切」、帰路で用いる「三番曳」と「狂言神楽」を交互に演奏した。笛・大太鼓・小鼓の演奏者は会場の両側に内向きで座り、小太鼓の演奏者は会場中央（前方）に配置された三丁の小太鼓に三列で並ぶ。小太鼓の正面には指導者が座り、演奏の中で構えや強弱、速度など細かい点を指導し、頃合いを見計らって交代の指示を出して稽古が進めら

れた。参加者は笛九名、小太鼓二十二名、大太鼓一名、小鼓八名だった。なお、一・二月に行われる笛・大太鼓のパート別稽古でも同様に曲を切り替えながら進行していく。指導者は笛の唱歌を唱えながらテンポや間の取り方などについて指導をする。演奏の出来栄だけでなく、長時間の演奏に耐えられる奏法にも主眼を置いているのだという。

（二）若戎車の稽古

若戎車では明郷校区在住者を中心とした岐阜若戎車奉曳会が囃子方を担当しており、毎年の稽古は明徳公民館で行われる。指導は邦楽囃子方・住田流の住田名央妃氏、住田喜久次氏、小野崎隆賢氏らによって行われている。

令和五年三月二十八日の稽古は、まず①笛、②打楽器（小太鼓・大太鼓・小鼓）の二グループに分かれて別室で行われた（写真8-9）。笛は指導者と共に膝を叩いてリズムをとりながら一曲ずつ唱歌を唱え、続いて笛を手に取って演奏をした。「車喜利」「早車喜利」「狂言囃鼓」「狂言神楽」「三番曳」「神楽」「七軒町」の順だった。



写真 8-9 笛の稽古風景（若戎車）



打楽器は、指導者の助言を受けながら「車喜利」「早車喜利」等を順に演奏した。その後、両グループは人形方と合流しカラクリ演技に合わせて全体演奏をした。「神楽」一回「人形囃子」を二セット演奏した後、休憩を挟んで「早車喜利」「車喜利」「狂言囃鼓」「狂言神楽」「神楽」「人形囃子」「七軒町」を演奏して終了した。

なお、金屋町（明徳地区内）出身者によれば、昭和末期ごろは鑄物会館で囃子の稽古が行われていたらしく、小学生がテープ音源に合わせて小太鼓・大太鼓を打っていたという。指導者は金屋町在住者のほか小熊町からも来ていた。

（三）清影車の稽古

清影車では京町地区内の七区が輪番で囃子方を担当しており、稽古会場は担当地区の寺院等を利用している。稽古は三月上旬ごろからはじまり毎週二回程度行われる（令和五年は合計九回）。指導は京町地区在住者が輪番とは関係なく毎年担当している。基本的には小太鼓の稽古が中心で、はじめのうちは指導者が楽譜を用いて唱歌を唱えながら手付や強弱、テンポ等についてゆつくりと説明をして、演奏者は小太鼓に見立てた木版をバチで叩いて習得をする。その後ある程度慣れてくると本物の小太鼓を用いるようになる。自主性を重んじていて、稽古の前後には担当小学生の号令で挨拶をする。

令和五年三月三十日の稽古は上宮寺（京町一区）本堂で行われた。指導者は笛と小太鼓それぞれ一名ずつ、参加者は十七名で、内訳は低学年（保育園年長・小学校二年生）が九名と、高学年（小学校三・六年生）が八名だった。小太鼓は会場中央に三丁配置されて参加者はその後ろに三列で並び、大太鼓は右後方に置かれ高学年が演奏を担当した。音源を使用しながら「しやぎり」「道行」「三番町」「しやぎり」の順で演奏をした。指導者は小太鼓正面に座ってバチの構えや強弱などについて指摘をし、頃合いを見計らって曲中で交代の指示を出す。笛の演奏は指導者のみで、随時音源に合わせて演奏をした。前半の稽古が

終わると低学年は解散し、中休み後に高学年のみで「しやぎり」「道行」「三番町」「しやぎり」の順で演奏をして終了した。また、同日にカラクリの稽古（本覚寺にて）も行われており、人形方の数名（成人）が譜面や音源を元にして「しやぎり」の笛を練習した。

（四）踊車の稽古

踊車ではボーイスカウト岐阜第十六団が囃子方を担当しており、関係者宅（金華地区内）を稽古会場としている（令和五年時点）。稽古は三月下旬から五回程度行われ、指導はボーイスカウトの関係者が担当している。囃子演奏はボーイスカウト活動の一環でもあり、技術面だけではなく話を聞く姿勢なども含めて厳しく指導が行われている。

令和六年四月二日の稽古には小学二・六年生までの計六名が参加した（写真8-10）。参加者は事前の稽古で曲を暗譜できているため、この日は祭礼当日と同じ演奏スケジュールで人員交代をしながら演奏を行った。前半は、①「三味線の神楽」、交代、②「車切」、③「三

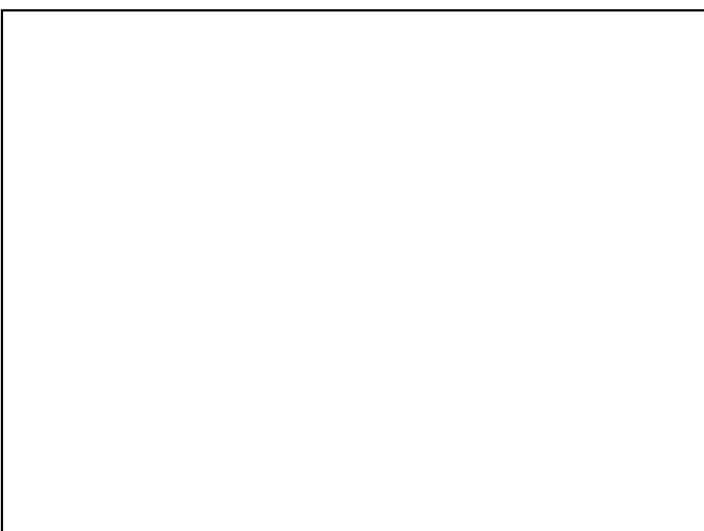


写真 8-10 稽古風景（踊山車）

味線の神楽」、交代、④「車切（途中で速く）」、⑤「三味線の神楽」、交代、⑥「三味線の神楽」、交代、⑦「車切」という流れだった。後半の稽古では山車蔵まで戻る際の「下り村」も演奏された。曲が終わるたびに指導者からテンポ等についての指導を受けながら習得していた。「三味線の神楽」はCD音源を使用し、他曲は指導者が笛の演奏をした。

現指導者によればボーイスカウトが囃子方を担当する以前は神振会が中心となつて囃子の演奏が行われ、囃子の指導者には元芸子だった人物もいたという。同氏は昭和末期に神振会の囃子稽古に参加した経験があり、当時の練習曲目は「三味線の神楽」「車切」の二曲だった。

第六節 楽曲について

（一）各山車の歴史と囃子

1 安宅車の囃子

安宅車は能楽「安宅」を題材にしたカラクリを載せた山車で、元は車之町（現本町五丁目）の所有だった。江戸時代後期の建造と考えられており、安政の大地震で大破した後、修復再建を繰り返し、明治二十一年（一八八八）の改修時に安宅を題材とするカラクリ人形が載せられた。その後、濃尾震災や岐阜空襲の被害を免れたものの、町内での管理が困難になり昭和三十年代に伊奈波神社へ寄進され、金華地区が輪番制で曳行や囃子演奏を行うようになった。現在演奏されている囃子は山車が神社へ寄進された頃に能楽師の後藤孝一郎氏によって整備されたものである。安宅車伝来の古文書や古老の証言を元に再現され、以後は後藤氏とその子息の指導を中心に伝承されている。

現在伝わっている曲目は、「道行」「早神楽」「車切」「狂言神楽」「三番叟」「人

形囃子」の六曲である。このうち「狂言神楽」「三番叟」は神社からの帰路で演奏されることから総じて「帰り囃子」と呼ばれることもある。その他、以前は「狂言神楽」の代わりに「下がり羽」という曲を帰路で用いていたこともあったが現在は演奏されていない。なお、『岐阜市史 通史民俗編』では安宅車が車之町で曳かれていた当時の稽古について取り上げられており、「道行」「早神楽」など現在と同じ曲名が紹介されている。

2 若戎車の囃子

若戎車はカラクリ人形を搭載した山車で、人形の箱書きや言い伝えなどから、江戸時代後期に加納本町三丁目（加納天満宮氏子）で建造され、明治期に金屋町（明徳地区内）に譲渡されたと考えられている。その後、伊奈波神社で保管されるようになり、現在は明郷校区の岐阜若戎車奉曳会が曳行や囃子演奏を行っている。カラクリは恵比寿が鯛を釣って、宝船が現れるという内容である。

囃子の由来については詳しく分らないが、少なくとも昭和末期の時点ではテープ音源に合わせて町内の小学生が小太鼓や大太鼓の演奏をしていたように、金屋町出身者や小熊町出身者が指導に当たっていた。その後、山車の曳行やカラクリ演技（平成四年から）は行われていたが、生演奏は中断してテープ音源の放送だけになった。

平成二十年代になると生演奏復活の機運が高まり、邦楽住田流の住田名央妃氏、住田喜久次氏、小野崎隆賢氏らの指導によって平成二十七年（二〇一五）に生演奏が復活した。復活に際して、山車に残されていた「早神楽」「人形囃子」のテープ音源や譜面が参考にされた。また、若戎車と同じく名古屋型山車で恵比寿人形を搭載する二福神車（名古屋市中村区）との交流も生まれ、その囃子を編曲して若戎車の曲目に取り入れている。

現在伝わっている曲は、「車喜利」「早車喜利」「狂言鞆鼓」「狂言神楽」「三番叟」「神楽」「早神楽」「七軒町」「おぼば」「人形囃子（名乗り・早笛・岩船）



の十曲である。そのうち、「狂言囃鼓」は住田流の手附（歌舞伎囃子）、「おぼば」は岐阜の民謡、その他は「早神楽」「人形囃子」を除いて二福神車の囃子に由来する曲目である（若戎車用に編曲されている）。

3 清影車の囃子

清影車は能楽「玉井」を題材にしたカラクリ人形を搭載した山車で、明治三十七年（一九〇四）に玉井町・元浜町・湊町の合同で建造され、現在は京町地区が曳き回しや囃子演奏を担当している。

囃子の由来については詳しく分からないが、昭和四十年代前半には京町地区の氏子による囃子演奏が行われていたようで、当時は子供が小太鼓や大太鼓、大人は笛や小鼓を担当していた（京町二区出身者談）。近年はテープ音源（笛・小鼓収録）に合わせ小太鼓・大太鼓を演奏する状態が続いていたが、平成二十三年頃から笛の生演奏も加わるようになった。

伝わっている曲目は「しやぎり」「道行」「三番叟」「人形囃子」の四曲である。「人形囃子」はテープ音源のみを使用している。

4 踊車の囃子

踊車は作り物を載せた露天の山車で、ボーイスカウト岐阜十六団によって曳行や囃子演奏が行われている。山車の来歴については詳しく判っていないが、昭和四十年代までは小熊町によって曳き出されていたようで、昭和十年の墨書きが残る大太鼓も伝わっている。その後、神賑会（現在は解散）に引き継がれ、昭和末期にボーイスカウト岐阜十六団が運営に携わるようになった。戦後に三味線の伴奏入りで日本舞踊「さくらさくら」を披露したこともあったようだが、現在は道中囃子のみで踊りは不随していない（『岐阜市史 通史民俗編』）。

伝わっている曲目は「車切」「三味線の神楽」の二曲である。このうち「三味線の神楽」はテープ音源に合わせて演奏をしている。現指導者によれば同氏が神振会で囃子を習った昭和六十年頃は「車切」「三味線の神楽」の二曲を演

奏していたという。その後、平成十四年頃に小熊町の加藤かざり屋からテープと譜面（「車切」「神楽」「下り村」の三曲）が発見され、そのうち「下り村」「神楽」を踊車の曲目に加えた。また、「三味線の神楽」で使用するテープは平成十六年頃に同じ内容で再録音をしている。

（二）曲の用い方

岐阜まつりは四月第一土・日曜日（宵宮・本楽）に行われ、両日とも山車が曳き出される。全四台のうち安宅車・清影車は両日参加で、若戎車・踊車は宵宮のみ参加している（令和六年時点）。

宵宮では日中から山車が各地区内を廻ってカラクリ人形の奉芸を行い、夕方に伊奈波神社へ向け出発。その後、伊奈波通1交差点での「どんでん」を終えて順に宮入する（踊車は地区所属でないため夕方以降に曳行）。各山車は神前でお祓いを受け、境内に整列をして順次カラクリ人形の奉芸を行う。その後、花火等の催しが終わると、安宅車・清影車は地区の会場へ戻り、若戎車と踊車は境内の蔵へ収蔵される。二日目は安宅車・清影車が朝から各地区を廻り、宵宮と同様に伊奈波神社1交差点でどんでんを行った後、伊奈波神社に宮入をして山車を収蔵する。午前中にはすべての行程が終了する。

各山車の囃子を場面別に比較すると表8-16のようになる。曲名の隣に記載されたA～Iは音楽的に共通する系統である。各山車とも独自であるが、平均して昼の道中では系統A（道行・神楽）、山車を回すときは系統C（車切・シャギリ）、神社からの帰路では系統D（狂言神楽）や系統E（三番叟）を用いている。特に山車を回す際に系統Cの「車切（シャギリ）」を用いる点は四台に共通している。人形囃子は各山車とも内容が異なっている。

1 安宅車

両日とも昼の道中では「道行」が演奏され、方向転換をする直前に「車切」

へと切り替え、向きが変わると再び「道行」へと戻す。曲を切り替える際は笛のヒシギ（運指「(632)―」）を合図に中断をし、次の曲を始める。交代などで停車する場合もヒシギを鳴らす但しその場合は運指「(632) (74)―0 (632)―」と吹く。また、大通りを通過する際も「車切」が演奏されることがある。道中では担当区内の各町内に向けてカラクリの演技が行われる。

宵宮で神社に向かう際の道中では「早神楽」が演奏され、昼と同様に方向転換や大通りの通過時に「車切」が演奏される。どんでんの行われる伊奈波通1交差点に差し掛かると「車切」をかなりスローテンポで演奏し始めて、山車が回るにつれて限界までテンポを上げていく。さらに山車が着地した直後の「早神楽」は特に速く演奏することになっている。その後、通常テンポの「早神楽」で参道を進んで宮入し、神前でお祓いを受けて定位置に整列する。その後、カラクリ奉芸を終えて帰路につき、道中では「三番叟」「狂言神楽」を交互に演奏する（切り替えタイミングは限定されていない）。帰路の方向転換では「車切」は演奏されず、終始ゆったりとした雰囲気で行く。

翌日の本楽では、宵宮の昼と同様に「道行」「車切」を用いながら地区内を回ってカラクリ奉芸をする。伊奈波神社1交差点でのどんでんでは宵宮と同様に「車切」「早神楽」を演奏し、その後は「道行」で宮入りして、最後に神前でカラクリ奉芸をして終了である。安宅車では指導者が常に山車後方に同伴しており、曲の切り替えや人員交代の指示を出している。

2 若戎車

若戎車では長らく生演奏が行われずテープ音源（道中は「早神楽」のみ）が放送されていたが、囃子復活に際して曲の用途が新たに決められた。

若戎車の曳き出しは初日（宵宮）のみである。当日の午前中、出発地点である伊奈波神社で儀礼囃子の「三番叟」を一回演奏した後、地区を曳行する。神社参道では「神楽」を演奏し、方向転換時は「早車喜利」、道中では「車喜利」

表 8-6 囃子の用いられ方

山車の名称 場面	安宅車	系統	若戎車	系統	清影車	系統	踊車	系統
昼の道中	道行	A	三番叟(*1)	E	道行	A	神楽	A
			車喜利	C				
			狂言鞆鼓	F	しゃぎり	C		
			狂言神楽	D				
山車を回す時	車切（帰路は除く）	C	早車喜利	C	しゃぎり	C	車切	C
夜の道中（神社へ）	早神楽	B	昼と同様		道行	A	三味線の神楽	I
参道曳行時	昼（夜）道中と同様		神楽	A	昼（夜）道中と同様		昼（夜）道中と同様	
宮入時			早神楽	B				
神社からの帰路	狂言神楽	D	七間町	G	三番叟	E	下り村	D
	三番叟	E	おばば(*2)	H				
からくり奉芸時	人形囃子		人形囃子		人形囃子			

*1) 山車蔵から出発する際に1度だけ演奏する。

*2) 山車蔵に到着したときに1度だけ演奏する。



写真 8-11 奉芸時の様子（若戎車）

「狂言囃鼓」「狂言神楽」の三曲を自由なタイミングで切り替えながら演奏する。曲の切り替え時は笛のヒシギ（高音）を合図に中絶をする。道中では所定の場所で行われる。令和五年は同日開催の「道三まつり」の会場、明郷小学校、北野神社等でカラクリ奉芸が行われ、どの場所でも同様に「車吉利」「神楽」「人形囃子」「七軒町」の順で組曲として演奏された。また、奉芸時は大太鼓奏者以外が山車の前に並んで演奏をする（写真8-11）。曳行を終えて明徳公民館に到着すると夜に備えて休憩に入る。

宵宮の夜、伊奈波神社へ向けての道中でも昼と同様の決まりで演奏が行われる。伊奈波通り1交差点では「早神楽」に合わせてどんでんカラクリ奉芸を行う。その後、境内に入ると「早神楽」で神前まで進んでお祓いを受け、定位

置に整列する。その後、

カラクリ奉芸では他山車とは違って囃子奏者がステージ上に上がって演奏をする。令和五年は昼同様に「車吉利」「神楽」「人形囃子」「七軒町」の組曲だった。

その後、境内の山車蔵まで戻ると「七軒町」を演奏し、蔵前で「おぼば」の演奏（唄付き）をして終了である（「おぼば」は令和六年から使用）。

3 清影車

昼および夜（神社へ向かう際）の道中では「道行」、方向転換の際に「しゃぎり」を用いるのが本来だったようだが、近年では「しゃぎり」も道中曲として演奏している。これは参加者の低年齢化によって「道行」の習得が難しくなったためである。両日とも昼の地区内曳行では低学年も活躍できるよう「しゃぎり」を主に演奏し、見せ場である宵宮夜の曳行（神社へ向かう際）では高学年をメインとして「神楽」を演奏している。「しゃぎり」についてはテープ音源を併用して演奏するのだが、途中からテンポが速くなっている。その点についてはあまり気にせず演奏をしている。令和五年の宵宮では伊奈波通り1交差点での「どんでん」でテープ音源を使用せずに生演奏を披露した。

4 踊車

踊車は宵宮でのみ曳き出される。特定の地区に所属していないため伊奈波神社への宮入がメインで、正興寺前から神社までの直線約600mを曳く。

道中では「三味線の神楽」が主で、大通り通過時や「どんでん」の際は「車切」が演奏される。また、神社境内の蔵に戻る際には「下り村」が演奏される。その他に、「神楽」という昼の道中で使用する曲を伝えているが、現状では夜しか山車を曳かないため演奏される機会はない。過去に、市制百周年記念行事で曳き出した際や、ボーイスカウト三十周年記念で岐阜まつりの昼曳行を行った際には「神楽」を演奏したという。令和五年を例に挙げると、

- ①正興寺から「三味線の神楽」で出発
- ②矢島町1交差点を通過する際に「車切」を演奏し、すぐに「三味線の神楽」に戻る
- ③伊奈波通り1交差点にて「車切」を演奏してどんでんを行う
- ④どんでんが終わってから神前まで「三味線の神楽」
- ⑤神前から定位に整列するまでの間に「車切」

⑥定位位置から山車蔵まで「下り村」を演奏
以上である。

(三) 道中曲について

道中で演奏される曲は音楽的に九グループに分けられる(系統A～I)。清影車の使用している演奏音源(笛と小鼓)については安宅車の囃子を録音したという話があり内容が同じだが、それに合わせて演奏する小太鼓と大太鼓の手は清影車独自の内容である。そのため「道行」「車切」の比較譜では小太鼓の手のみを取り上げることにした。また、比較用に名古屋の若宮祭「福祿寿車」の曲も引用した。大多数の能楽系山車囃子で基音は運指4なのだが、福祿寿車を含む一部の山車では運指5を用いている。これは能楽藤田流の影響によるものだと考えられている(安宅車の運指表参照)。岐阜まつりでは安宅車の「狂言神楽」や若戎車の各曲で基音が運指5で、他は運指4である。運指については譜例の中で安宅車だけを参考に記載する。また、能管は管ごとに高音が微妙に異なるため、今回の譜例では平均的な値で統一した。

系統A 「道行(神楽)」

能楽囃子「神楽」を原曲とする楽曲である。愛知・岐阜の能楽系山車囃子ではかなり広く普及している。若戎車・踊車では「神楽」と呼び、安宅車についても通名は「道行」だが譜面には「道行(神楽)」とある。内容を比較すると、清影車「道行」と踊車「神楽」の小太鼓の手は安宅車「早神楽」に近い(譜例1 参照。十三～二十小節目付近)。また、若戎車は基音が他よりも高く運指5の音高になっており、演奏開始箇所も他三台とは異なる(譜例1 九小節目)。

系統B 「早神楽」

系統A「道行(神楽)」のテンポを速くした楽曲だが、内容を若干変えて演奏する為、本書では別系統として扱うこととした。安宅車では夜の道中曲とし

表 8-7 道中曲の系統

系統	安宅車	若戎車	清影車	踊車
A	道行	神楽	道行	神楽
B	早神楽	早神楽		
C	車切	車喜利 (早車喜利)	しゃぎり	車切
D	狂言神楽	狂言神楽		下り村
E	三番叟	三番叟	三番叟	
F		狂言鞆鼓		
G		七軒町		
H		おばば		
I				三味線の神楽

Date: _____			
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	

[illegible]



て用い、「道行」と比べて開始箇所や笛・打楽器の手が少し異なる（譜例1）。小太鼓と笛に焦点を当ててみると、「道行」の四行目（譜面十三小節目）に相当する箇所から演奏を開始し、二周目以降は冒頭二行（譜面十三～二十小節目）の打楽器が早神楽独自の内容に変わる。また、笛についても同様の二行（譜面十三～二十小節目）に加え、一周目最終行（譜面九～十二小節目）も独自で、以後はその内容が繰り返される。それ以外にも跳ねるようなリズムのメロディになっている箇所もあり「道行」とは全体の雰囲気は違っている。

若戎車では名古屋の文化を取り入れて宮入時に演奏するようにしており、メロディが道行よりも少しだけ簡素になっている。名古屋方面では山車のすれ違いなど特別なタイミングで演奏されることが殆どだが、竹鼻まつり（羽島市）や高田まつり（養老町高田）では安宅車と同じく道中曲として用いられている。

系統C 「車切」 しやぎり

愛知・岐阜の能楽系山車囃子で最も広く普及している楽曲である。「社切」「シャンギリ」「サンギリ」など表記や呼び方は地域ごとに異なり、道中の他、山車を回転させる際の曲として速いテンポで演奏する場合が多い。岐阜県域では美濃・関・大湫・大垣・竹鼻・養老高田などで伝承されている。前半が能楽囃子「狂言神楽」と共通していることから広義に能楽系山車囃子に分類される。

岐阜まつりでは主に山車を回転させる際に演奏される（譜例2）。ただし、若戎車では遅いテンポのものを「車喜利」として道中で用い、速いテンポのものを「早車喜利」として山車回転時に用いている（内容は同じ）。他三台でも「どんでん」の際に遅いテンポで演奏を開始するが、テンポごとに別曲としては扱っていない。

系統D 「狂言神楽」 きやうげんかぐら

能楽囃子の「狂言神楽」を原曲とする楽曲である。若戎車では通常の道中曲として演奏し、安宅車と踊車では神社からの帰路で用いている。安宅車では特に遅いテンポで演奏する。関まつり（関市）や竹鼻まつりでも夜（帰路含む）で演奏される例がある。

系統E 「三番叟」 さんぱんそう

能楽囃子「三番叟（揉の段）」を原曲とする楽曲である。歌舞伎囃子にも取り入れられており、若戎車ではそこから引用して山車が発する前の儀礼曲として演奏している（大垣まつり「布袋軸」でも同系統のものが伝わっている）。一方、安宅車と清影車では神社からの帰路で用いている。そのメロディは愛知県域に広まっているものよりも美濃まつりや関まつりで演奏されているものに近い。

系統F 「狂言鞆鼓」 きやうげんかづこ

若戎車でのみ演奏されている楽曲で、歌舞伎囃子から取り入れたものである。山車囃子としての使用例は少ないが、名古屋型山車では田原祭り（愛知県田原市）の応神天皇車で方向転換時の曲として演奏されている。

系統G 「七軒町」 しちけんちやう

若戎車の帰路で用いられている。原曲は尾張東照宮祭（名古屋市）で曳かれた橋弁慶車（下七間町）の「帰り囃子（雨降り囃子）」とも呼ばれたものである。歌詞をつけてわらべ歌としても好まれた程で、橋弁慶車が戦災消失した後も愛知県を中心に山車囃子として盛んに演奏されている。若戎車では二福神車（名古屋市中村区）に伝わる曲をモチーフにして新たに作り入れた。岐阜周辺では関祭りの加茂山車（岐阜より譲渡）で夜曳き曲「夜山」として演奏されている。

系統H 「おばば」

原曲は岐阜の民謡「おぼば」である。古くから祭礼や宴席などの締めで歌われた曲で、若戎車ではその意味を汲み取って山車蔵へ帰着した際の納め唄として用いている（演奏と唄による）。岐阜周辺では関祭りの浦嶋山車に伝わっており、夜の曳行時に「おぼば」として唄付きで演奏されている。また、大垣祭り（大垣市）の大黒軸でも神前奉納の退出時に「おぼば」という曲名で演奏されている。

系統Ⅰ 「三味線の神楽」

踊り山車に伝わっている曲だが、原曲は不明である。曲名に「三味線」とあるとおり三味線の演奏が入っているが、実演されることはなく小太鼓と大太鼓だけが生演奏される。音源がどのような経緯で収録されたのか等は不明である。

以上の他、安宅車には帰路で使用する「下がり羽」という全七行からなる曲が伝わっていたそうで、前半三行は「車切」、後半四行は「狂言神楽」に近い内容だったとのことである。

（四）カラクリ演技時の曲

1 安宅車

安宅車のカラクリは能楽「安宅」を題材にしている。能楽での大まかなあらすじは以下の通りである。「源頼朝と不和となった源義経の一行は山伏姿となつて奥州平泉をめざす。途中、安宅の関で一行を阻む富樫某（関守）との問答の末、弁慶の機転によつて無事に関を超える。その後、非礼を詫びる富樫某と酒宴となり、弁慶が延年の舞を舞う。そして一行は富樫某に別れを告げて奥州へと下っていく。囃子については能楽では義経一行の登場で「次第」、弁慶の舞で「男舞（山伏ガカリ）」が笛・小鼓・大鼓によつて演奏される。

カラクリでは酒宴の場で弁慶が舞う姿が表現されており、謡の後に弁慶が扇を素早く開く場面が見所の一つである。囃子についてはカラクリ用に三部構成で編曲されており、部分名称はなく全体で「人形囃子」と呼んでいる。演奏はすべて生演奏で行われ、楽器は笛（二々複数名）、小鼓（複数名）、謡（一名）で構成される。笛は一管が正式だが、観客で混み合った場所等では複数名で演奏することもある。

① 弁慶の登場

演奏者…笛（一名々複数名）・小鼓（複数名）

笛のヒシギによつて曲が始まり、中盤で弁慶人形が動き出し、場を大きく一周廻る。この部分の曲は能楽囃子「一声」が原曲になっているものと思われる。

② 舞直前部分

演奏者…小鼓（複数名）、謡（一名）

弁慶人形が扇を閉じた状態で場を動き、その間、謡に合わせて小鼓が演奏される。謡が終わると弁慶人形は扇を開く。謡の内容は以下の通りである。

「面白や山水に。面白や山水に。盃を浮かめては。流にひかるる曲水の。手先づ遮る袖触れて。いざや舞を舞おうよ。元より弁慶は三塔の遊僧。舞延年の時の和歌。これなる山水の。落ちて巖に響くこそ。鳴るは瀧の水」

③ 舞部分

演奏者…笛（二々複数名）、小鼓（複数名）

弁慶が舞う場面である。曲は「男舞（山伏ガカリ）」のメロディに近いが、独自に編曲されている。大きく三段落に分かれており、一々二段落は「男舞（山伏ガカリ）」の「カカリ」「初段」を少し短くした内容に近く、三段落は同曲の最終段落に相当すると思われるが、途中で黄鐘調から盤渉調へと変わり基音が高くなる。この部分は能楽囃子「早舞」の初段ヲロシ以降の地に似ている。



2 若戎車

若戎車のカラクリは恵比寿が鯛を釣り、宝船が出現するという内容である。能楽に該当演目はなく独自のものであるが、能楽「岩船」から取材した謡や、囃子曲「早笛」がカラクリ演技中に用いられている。詳しい経緯は不明であるが「宝船」が登場する点が「岩船」と共通するため選曲された可能性がある。長らくテープ音源（名乗り（謡）「早笛」「岩船（謡）収録」）を用いていたが、それを元にして平成三十年（二〇一八）から生演奏をするようになった。元のテープ音源が録音された時期や経緯は不明である（カラクリ奉芸は昭和後期に中断し平成四年（一九九二）に復活している）。

①「名乗り（謡）」

演奏者…謡（子供）

名乗りは能楽において登場人物が自己紹介や場面についての説明をする部分である。若戎車では笛のヒシギに続いて名乗りが謡われ、若恵比寿人形が周囲を見渡して場を一廻りする。この部分は子供が複数名で謡うことになっており、復活に際して謡い易いよう節を少し変更した。

「そもそもこれは。事代主命とは我がことなり。あら、麗かな春の景色やな。有り難や。君の恵みも今この時。面白や。面白や。」

*事代主命は出雲の国譲りで釣りをしたことから恵比寿と同一視されている。

②「早笛」

演奏者…笛、小太鼓、小鼓（それぞれ複数名）

笛、小太鼓、小鼓によって演奏される速いテンポの囃子である。この曲の冒頭で若恵比寿人形は鯛を釣り、喜び勇んで場を大きく二周廻った後、正面に置かれた宝袋の前で待機する。

③「岩船（謡）」

演奏者…謡（男性）、小太鼓、小鼓、笛

能楽「岩船」で用いられる謡が小太鼓・小鼓の演奏に合わせて謡われる（それぞれ複数名）。この部分は男性が謡うことになっており車力の男性陣を中心にして謡っている。途中「宝の御船」と謡われる部分で宝袋が開いて宝船が登場する。その後、若恵比寿人形が大きく三周廻って演技は終了する。謡の終わりでは笛（打ち込み）の演奏も加わる。以下は「岩船」の謡である。

「長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出すや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。」

3 清影車

清影車のカラクリは能楽「玉井」を題材にしている。能楽での大まかなあらすじは以下の通りである。「神代の昔、彦火火出見尊（山幸彦）は兄から借りた釣針を魚にとられてしまい、それを探し求めて海神の都へと赴き、不老長寿の水が湧くという井戸で海神の娘（豊玉姫・玉依姫）と出会う。その後、尊は豊玉姫と契りを交わし、三年の月日が流れると海神たちから珠玉と釣針を受け取って地上へと戻っていく」。

カラクリでは、尊が海都を後にする場面で姫たちが舞う「天女舞」、海神が威厳を示して舞う「舞働」が演じられている。人形は一体二役で、豊玉姫の人形が面かぶりをして海神（清影車では龍神と呼んでいる）に変化し、舞が終わると再び面をはずして豊玉姫へと戻る。そこがカラクリ演技の見せ場である。

囃子は生演奏ではなく、人形が復活した平成十年頃に吹き込まれたテープ音源を使っている。笛と太鼓による能楽囃子で、笛は藤田流、太鼓は金春流の能楽師による演奏である。能楽では笛・太鼓・小鼓・大鼓の構成によって姫たち

の登場で「出端」、舞で「天女舞」。海神の舞で「静カナル舞働」、姫たちの中入りで「来序」を演奏するのだが、清影車で使われているテープでは大きく異なっている。おそらく、演技時間等も考慮してカラクリ用に編集されたのである。演技の流れとテープに吹き込まれている曲は以下の通りである。

①豊玉姫の登場と天女舞 使用曲「下り羽」「祈り」

豊玉姫人形は西・東・正面へ移動をして礼をすると、後方に向けて大将人形（彦火火出見尊）に礼をする。その後、舞が始まり、最後は後方（大将人形側）へ向きを変えて待機する。そこまでの流れで囃子は演技が始まると同時に「下り羽」が流れ、途中からテンポの速い「祈り」へと切り替わる。曲の切り替わり部分が演技と対応しているわけではないが、面かぶり演技に向けて盛り上げていく意味があるものと思われる。

②面かぶりで龍神へと変わり舞う 使用曲「早笛」

笛のヒシギ（高音）を合図に、面かぶりをして正面を向く。そこから龍神の舞が始まる。曲はテンポが速く勇壮な「早笛」が用いられている。

③豊玉姫へと戻る 使用曲「来序」

「早笛」が終わるタイミングで面をはずして豊玉姫に戻る。そこから、尊との別れを惜しむように東西にゆつくりと移動し、正面に礼をして演技が終了する。この間「来序」が流れる。

以上のような流れである。「祈り」「来序」は人形からくりで用いられる例があまりないが、「下り羽」は登場など演技前半、「早笛」は見せ場（クライマックス）で用いられる例がある。例えば、岐阜祭りでは若戎車が「早笛」を使用

している（鯛を釣り上げる場面）。

第七節 他地域との関係

（一）岐阜県下における能楽系山車囃子の分布

これまで述べてきたように岐阜まつりで曳かれる四台の山車では、道中曲・カクリ曲ともに笛（能管）・小太鼓・小鼓・大太鼓による能楽系囃子が盛んに演奏されている。こういった事例は愛知・岐阜県域に見られ、岐阜県では名古屋型やそれに準ずる形式の山車で演奏されている場合が多い。おそらく山車やカラクリと繋がりを持ちながら伝搬したのであろう。例えば東部のダンジリ（稚児舞が付随する）や、西部の長浜型山車（子供歌舞伎・舞踊が付随する）、大垣まつりや蚕まつり（瑞穂市美江寺）で曳かれるような露天型の山車（屋根なし、置き人形搭載）等では能楽系囃子が演奏される例は少ない。演奏されていたとしても同じ祭礼の中で名古屋型に準ずる山車が曳かれていることが殆どで、その影響を受けているものと思われる（岐阜まつりの「踊車」はその一例）。

表8-8、図8-5は岐阜県下で能楽系囃子を演奏している代表的な地域とその詳細である。これら以外にも、古川祭（飛騨市）や高山祭（高山市）宮代白山神社例祭（郡上市）ではカラクリ演技の際に謡曲を含む能囃子が用いられているが、調査が不完全なため今回の一覧表には載せなかった。表を見ると分かるように、八か所で曳かれる計四十三台のうち八割超の三十七台で能楽系囃子が用いられている（CD使用含む）。さらに細かく見ると、大垣まつりが全十三台中の八台、高田まつりが全十三台中の二台で、それ以外の六か所は曳き出されるすべての山車で用いられている。これらは代表例であるから岐阜県全体について論ずるにはいたらないが、少なくとも今回取り上げた祭礼の多くでは



- *1) 曳かれている山車のうち能楽系囃子を用いている台数。
 *2) カラクリ演技を伴う山車のうち演技中に能楽系囃子を用いている台数。

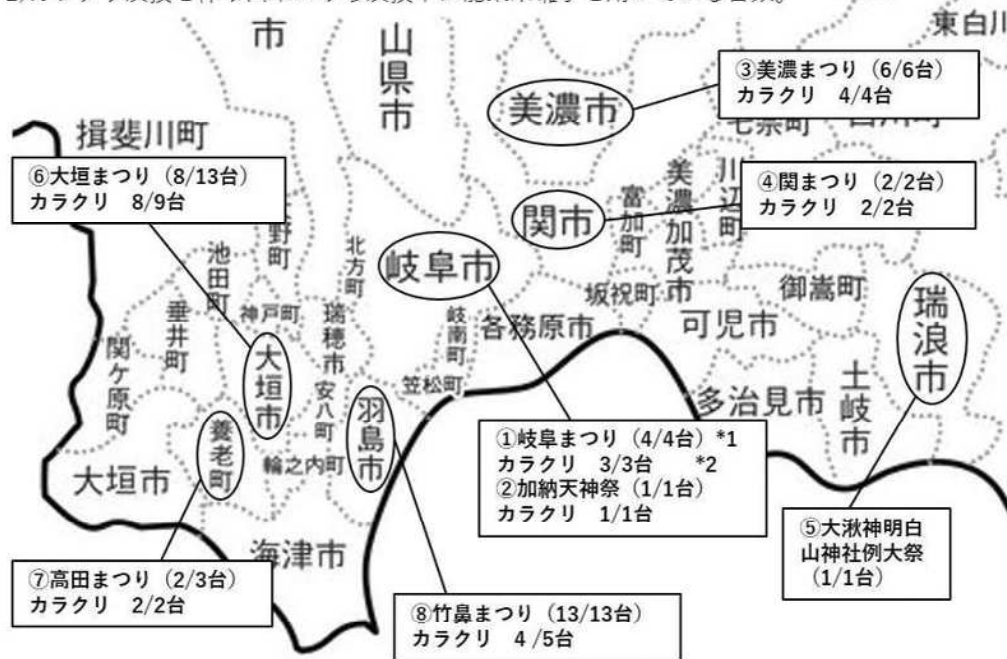


図 8-5 岐阜県下の山車祭礼における能楽系囃子の分布

表 8-8 山車の形状および演奏用途別一覧

単位：台

No.	祭礼名	地域	山車の形状と台数		能楽系曲使用	能楽系道中曲	カラクリ人形		
							演技あり	能楽系曲	謡使用
①	岐阜まつり	岐阜市	名古屋型	3	3	3	3	3	2
			露天型	1	1	1	なし	なし	なし
②	加納天神祭	岐阜市	準名古屋型	1	1	1	1	1	1
③	美濃まつり	美濃市	名古屋型	3	3	3	3	3	1
			準名古屋型 *1	3	3	3	1	1	1
④	関まつり	関市	名古屋型	2	2	2	2	2	2
⑤	大湫神明白山神社例大祭	瑞浪市	準名古屋型	1	1	1	なし	なし	なし
⑥	大垣まつり	大垣市	準名古屋型 *2	10	8	3	9	8	7
			露天型 *3	3	なし	なし	1	なし	なし
⑦	高田まつり *4	養老町	準名古屋型	3	2	2	2	2	1
⑧	竹鼻まつり	羽島市	準名古屋型	13	13	13	5	4	1
合計				43	37	32	27	24	16

*1) 布袋車（古川町）は踊山車に布袋人形を搭載して屋根を付けた形状である。他に船型も 1 台含んでいる。

*2) 10 台のうち 2 台は前方に長浜型のような踊り舞台が搭載されている。

*3) 「三輪ヤマ」と呼ばれ、2 台は置き人形、他 1 台は杖頭人形（表中「演技あり」に含めた）を搭載。

*4) 「照鱗閣ヤマ（長浜型）」は長らく休車中のため除外した。

能楽系囃子が山車囃子の土台として認識されているようであるし、名古屋型山車を曳く岐阜市周辺の祭礼では特にその意識が強いことが分かる。

道中曲での使用率が低い大垣まつりについては、戦災消失からの復興による影響がある他、三輪軸（露天型）や長浜型山車で演奏される系統の曲（俗謡系囃子など）を道中曲として演奏している例が多く、カラクリ演技では謡曲のCD音源を用いている山車が約半数である。また、高田まつりの神楽獅子軸はカラクリを搭載せず神社等での獅子舞を主とし、神楽囃子を軸の道中曲として用いている。

カラクリ人形の演技を行う山車は二十七台で、そのうち約九割の二十四台で能楽系囃子が用いられ、さらにその約七割の十六台では謡曲が用いられている。謡曲が用いられないのは唐子の文字書きや鉦叩き、湯取神事、鯉押さえなど、能楽以外をテーマにしているものが多い。また、美濃まつりの「浦嶋車（泉町）」のように以前は謡曲が付いていたが途絶えたというケースもある（表では未カウント）。

以上に取り上げた祭礼だけでも能楽系囃子を用いる山車は相当数に上り、カラクリ演技に謡曲を用いる山車が多いことが分かる。これは岐阜県域に限った特徴である。愛知県域ではカラクリ演技に謡曲が用いられる例は極めて少なく、筆者の知る限りでは名古屋型山車では例がなく、車体の形式を問わずに数えても津島市や半田市で数件確認される程度である。手遣いの三番叟（知多半島に多い）や、浄瑠璃人形の演技（知立祭、岡田祭、上野間祭など）で短い台詞や語りが入るほかは楽器の演奏だけの場合が殆どである。

（二）岐阜まつりに関係する山車と囃子の伝搬

1 山車の伝搬

伊奈波神社の例祭では慶長年中（一五九六～一六一五）に二十四台の山車が

曳かれるようになり、その後、少なくとも江戸時代中期には能楽を題材としたカラクリ人形を搭載した山車が登場していた。江戸時代から明治期にかけて衰退した時期もあったようだが最盛期には三十台近くが曳き出された。しかし、濃尾地震（明治二十四年（一八九一））や第二次世界大戦の被害によつてその殆どが失われ、現在は四台が曳かれる状態である。そういった歴史の中で山車の譲渡が行われることもあったようで、伊奈波神社の氏子地域と関係のある山車が周辺地域に残っている。例えば、「加茂山車（関まつり、本町三丁目）」は明治二十七年（一八九三）に岐阜の矢島町から、「三輪車（美濃まつり、殿町）」は明治三十六年（一九〇三）に岐阜の白木町から、それぞれ譲渡されている。一方、逆に他地域から譲り受けた例もあり、加納天満宮の氏子地域である本町三丁目から譲渡された「若戎車（岐阜まつり、明徳地区）」がそれに該当する（元の名称は「蛭子車」）。

以上に挙げた関・美濃・加納の祭礼は山車の形状（名古屋型）や囃子の内容など、岐阜まつりと共通する部分が多く見られ、同じ文化圏に含まれていると考えられる。また、名古屋から旧車を譲り受けたという町内もあり、名古屋の文化とも密接に関係している。具体的に挙げると、美濃まつりの「船山車（相生町）」は明和九年（一七七二）に末広町（現中区、若宮祭）から、「浦嶋車（泉町）」は明治十三年（一八八〇）に万松寺（現西区）から、「靱車（常盤町）」は益屋町（現中区）所有だったものを明治三十年（一八九七）に、それぞれ購入している。また、関まつりの「浦嶋山車（常盤町）」についても明治二十七年（一八九四）から山車を曳くようになったと記録されており、言い伝えによれば名古屋の円頓寺近辺から購入したのだという。

2 囃子の伝搬

岐阜まつりの山車でいつ頃から能楽系囃子が演奏されているかについては氏子地域に記録や言い伝えが残されていない。しかしながら、能楽で使われる能



楽囃子そのものについては古くから町人に浸透していたようで、名古屋を本拠地として活動する能楽笛方藤田流の『藤田家門人帳簿（江戸中期から明治期の弟子名簿）』には伊奈波神社の氏子地域に住んでいた商人の名前が多く載っているという。藤田流の能楽師は各地の山車祭礼に積極的に関わっていたようで、愛知県域では名古屋城下の東照宮祭や、鳴海、西枇杷島。岐阜県域では大垣や竹鼻などで指導を行ったことが知られている。伊奈波神社の氏子地域においてもそういった経緯で能楽系囃子が祭礼に取り入れられた可能性は十分に考えられる。

一方、岐阜周辺地域に目を向けると、岐阜から譲渡された山車についても囃子の由来は分かっているのだが、それ以外の山車に岐阜関連の記録が残っている。美濃まつりで曳かれている「船山車（相生町）」では明治三年（一八七〇）に囃子が一新され、岐阜の安川助右衛門なる人物を指導者として招いて稽古をした。また、習得した曲目は「能 神楽 付 早神楽」「三羽叟 鈴之段」「車切」「狂言神楽」だった『諸色勘定帳（相生町）』。殆どの曲が現在の岐阜まつりで演奏されている能楽系囃子と同名である。「能」とあるからそれらの囃子が能楽由来であるという認識があったのだろう。時期については、明治三年に指導を行っているのだから、岐阜では少なくとも江戸時代末期にはその囃子が存在していたと考えてよいだろう。また、関まつりの「浦嶋山車」についても山車を購入した明治二十七年に指導者（出身不明）を招いて囃子を習得しており、その曲目は「神楽」「下り葉」「三三番（原文ママ）」「社切」だった『記録帳 第宅號（常盤町）』。「三三番」以外は現在も伝わっており、内容は能楽系囃子である。

以上のことから、岐阜やその周辺地域では少なくとも江戸時代末期～明治期には能楽系囃子が山車の囃子として浸透していた可能性が高く、能楽を嗜む町人たちの存在もその一因だったと考えられる。

（三）岐阜まつりと周辺地域との共通性

1 曲の比較

岐阜まつりから安宅車の道中曲を例に挙げて各地の曲目と音楽的に共通するものを一覧にすると表8-9のようになる。岐阜まつりに関係する山車を優先し、他はなるべく共通曲を網羅できるように選択した。また、参考までに名古屋の若宮祭で曳かれる福祿寿車（名古屋型山車）の曲目も加えてある。若宮祭はかつて名古屋三大祭の一つに数えられた名古屋を代表する山車祭礼である。各祭礼での曲の用いられ方については一様ではないため、本書では岐阜まつりと用法が似ている例を紹介することにとどめる。また、岐阜まつりにおける各系統の詳細については第六節を参照いただきたい。

・系統A「道行（神楽）」は安宅車と同じく昼の道中で用いられる場合が殆どで、宮人時に使われる場合もある（美濃まつり「轡車」等）。

・系統B「早神楽」は「道行（神楽）」のテンポを速くして内容を少し変えたもので、関や竹鼻では昼の道中で用いられており、高田まつりの狸々軸と林和靖軸では安宅車のように夜の道中曲としている（狸々軸は帰路のみ）。また、愛知県域では大山祭り（大山市）や足助祭り（豊田市）、津島秋祭り（津島市）が帰路（夜）で用いているが、名古屋周辺では山車の回転や他山車とのすれ違いなど勢いをつける際に演奏することが多く、夜専用の道中曲として用いられる例は確認されない。

・系統C「車切」は最も多くの地域で用いられている。通常の道中の他、坂を上る際（竹鼻）や、安宅車と同じく山車の回転時（岐阜・加納・美濃・大湫・高田）で用いられることもある。美濃まつり「船山車（相生町）」では帰路の曲として用いている。

・系統D「狂言神楽」は美濃や大垣のように行きの道中で使われることもあるが、関や竹鼻では安宅車のように帰路で用いられることがある。例えば、竹鼻ま

表 8-9 地域ごとの能楽系囃子（道中曲）比較

祭礼名	地区	山車名	曲名					
			A	B	C	D	E	
①岐阜まつり	金華地区	安宅車	道行	早神楽	車切	狂言神楽	三番叟	
②加納天神祭		鞍馬車	道行		車切			
③美濃まつり	相生町	船山車			戻り囃子	シャギリ	三番叟	他 1 曲
	殿町	三輪車			車切		三番叟	他 1 曲
	常盤町	靱車	本バヤシ		シャギリ		三番叟	
④関まつり	本町三丁目	加茂山車	神楽	早神楽	車切	帰り山	三番叟	他 2 曲
	常盤町	浦嶋山車	神楽	早神楽	社切			他 3 曲
⑤大湫神明白山神社例大祭			ナカ		マワリメ		モドリ	他 1 曲
⑥大垣まつり	本町	相生軸			道行		帰り軸	
	竹島町	榊軸				道行		
⑦高田まつり	西町（*1）	猩々軸		早神楽	親鳥		二・一	他 1 曲
	東・中町	林和靖軸	本神楽	早神楽	シャンギリ			
⑧竹鼻まつり	大西町	湯取神子		早神楽	サンギリ 三木利	チンセイナガラ 鎮西神楽		他 1 曲
若宮祭		福祿寿車	神楽	早神楽	車切	狂言神楽	三番叟	他 2 曲

（*1）能管ではなくアイジャク笛（篠笛十本調子に近い囃子笛）を使用。

つりの川町では「夜山三切くずし」という曲名で夜間（帰路含む）の曲として伝わっていて、大西町では「鎮西神楽」という曲名で宮入用になっているものの、後半部分と似た「四ツ囃子」という曲は夜間（帰路含む）になっている。各祭礼に伝わるものを比較すると安宅車では四行目（七、八小節目）が独特なフレーズになっていることが分かる（譜例 3）。なお、美濃まつりではニワカで用いる俗謡曲（篠笛使用）を帰路の曲としている山車が多い。

・系統 E 「三番叟」は能楽の三番叟（揉の段）から取材されたと思われる曲で、岐阜県下の多くの祭礼で使用され、大垣や大湫では安宅車と同じく帰路の曲として用いられる例がある。また、福祿寿車（若宮祭）でも帰路の曲として用いている。安宅車を基準として各地に伝わるものをフレーズの行構成で比較すると以下ようになる。概ね内容が共通する行を同じアルファベットで表記してある（譜例 4）。

岐阜まつり 安宅車 「三番叟（全六行）」 A・B・C・D・E・F
美濃まつり 船山車 「三番叟（全五行）」 A・B・C・E・F
関まつり 加茂山車 「三番叟（全五行）」 A・A・C・E・F
高田まつり 猩々軸 「二・一（全五行）」 D・F・A・B・C
大湫神明白山神社 「帰り（全六行）」 D・F・A・B・（二行）
出来町天王祭 河水車 「三番叟（全五行）」 D・F・A・B・C
尾張津島秋祭り 宮車 「もみのだん」 D・F・A・B・C *漢字表記未調査
若宮祭 福祿寿車 「三番叟（全十行）」 B（G・H・I・J・K）・C・D・F・A
犬山祭 外町「とつば（全十行）」 B（G・H・I・I・J・K）・C・F・A
岐阜県域では岐阜周辺のグループ（岐阜・美濃・関）と、大湫・高田のグループに大きく分かれている。岐阜周辺のグループは構成が似通っていることに加えて独特な E のフレーズを含んでおり、同一の起源をもつ可能性が高い。さらに安宅車だけは D のフレーズを含んでいる。後者のグループは愛知の津島秋祭



山車お囃子 山車囃子		山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子	山車囃子

山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子
山車お囃子 山車囃子	山車囃子

山車お囃子 山車囃子

山車お囃子 山車囃子

山車お囃子 山車囃子

山車お囃子 山車囃子



「山車お囃子」

昭和 19 年

「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
「山車お囃子」	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子

山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子

昭和 19 年 10 月 10 日

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

り宮車（津島市）や出来町天王祭の河水車（名古屋市東区）で演奏されているものと構成が同じで、福祿寿車（若宮祭）のそれとは違っている。地理的に岐阜に近い犬山祭でも昼の道中曲として盛んに演奏されているが、構成は福祿寿車のものに近い。なお、大垣まつりの相生軸（本町）や菅原軸（新町）に伝わっているものはそれらのグループには属さず独特である。

2 囃子方の配置

第四節でも触れたように岐阜まつりの山車では小太鼓の演奏者が車体後方に進行方向とは逆向きで座っている。これは岐阜やその近隣の加納・美濃・（関）でのみ見られる特徴である。それらの山車では床が少しだけ車体後方に出ている、高欄で囲まれているケースもあり、おそらく演奏形式を想定して車体が新造あるいは改造されている。愛知県域の名古屋型山車では後方に小鼓の奏者が足を投げ出す形で腰掛けることが多く、そういった機構は見られない。また、岐阜県下の名古屋型に準ずる山車についても後方に並ぶ例は見られない（写真8-12）。

美濃まつりでは布袋車（かつて屋根なしの踊山車だった）のみが前方に並んで座る形式になっているが、他五台は後方に座っている。人数は車体の大きさによる制限があるようで、浦嶋車・靱車では三名、聖王車・三輪車・船山車では二名となっており、子供だけでなく大人も演奏している。関まつりでは加茂山車・浦嶋山車とも車体前方に二名が並んでいるが、加茂山車では後方に座るのが本来だっ



写真 8-12 上鍋屋町（竹鼻まつり）車体後部



たという。両車とも小学生が演奏をしている。また、加納天神祭の鞍馬車では車体後方に三名並んで座っている(写真8-13)。

3 若戎車のカラクリについて

第六節で詳しく紹介したように若戎車のカラクリは恵比寿が鯛を釣り、宝袋から宝船が登場するというストーリーである。これは能楽と直接関係が無い内容であるが、宝船からの着想と思われる能楽「岩船」の謡や囃子曲「早笛」が用いられている。

岐阜県下では竹鼻まつりの上町に似た系統のからくりが現存している。それは明治期に再建されているが演目としては天明六年(一七八六)から伝わるとされている。内容は能楽「岩船」をテーマにしたもので、勅使と童子の人形によって演じられる(写真8-14)。演技の流れと使用楽曲は以下の通りである。

① 勅使(人形)の登場。楽曲は「ヒシギ」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

② 前方の宝袋が割れて童子(人形)が登場し、面かぶりをして龍神となり激しく舞う。楽曲は「早笛」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

③ 再び面を外し童子の状態で舞のような所作をする。楽曲は「岩船(謡曲)」で、謡に



写真 8-13 鞍馬車(加納天神祭)車体後部



写真 8-14 龍神の面かぶりをする童子(写真左)

合わせて小太鼓・小鼓を演奏する。

以上である。①の「ヒシギ」は能囃子「出端」、②の「早笛」は能囃子「早笛」に相当すると思われる。若戎車とは使用されるタイミングが異なるが、「早笛」「岩船(謡曲)」を用いる点は共通している。

一方、愛知県の花車神明社祭(名古屋市中村区)では恵比寿と大黒の人形を載せた名古屋型の二福神車(天保七年(一八三六)頃建造)が曳かれている。カラクリ演技は、恵比寿が鯛を釣り上げると前方の宝袋が割れて宝船が登場するというストーリーである(写真8-15)。演技の流れと使用楽曲は以下の通りである。

① 恵比寿・大黒が手をかざして辺りを見渡す。楽曲は「出端」「二ノ句」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

② 恵比寿が鯛を釣り上げ大黒と共に体を揺らして喜びを表す。楽曲は「棹ノ手」で、笛・小太鼓・小鼓・大太鼓にて演奏。

③ 宝袋が割れて宝船が登場。楽曲は「早笛」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

以上である。①の「出端」「二ノ句」は能囃子「出端」、③は能囃子「早笛」に相当すると思われる。②は独自の曲である。謡は入らないが若戎車と同じく「早笛」が使用されている。なお、二福神をテーマにした山車は東照宮祭(名古屋)の上長者町で享保十七年(一七三二)に建造されており、



写真 8-15 二福神車(花車)のからくり

花車等の地域はその影響を受けていると考えられている。

4 鞍馬車（加納天神祭）への囃子伝授

伊奈波神社の氏子区域から南に位置する加納天神町には加納天満宮が鎮座しており、十月に行われる例祭（加納天神祭）で鞍馬車と呼ばれる準名古屋型の山車が曳かれている。これは氏子町内の本町五丁目が所有していた山車で、能楽「鞍馬天狗」を題材にしたカラクリを載せている。第二次世界大戦の戦災を免れ、その後は天満宮が引き継いで保存している。

加納城の守護神であった加納天満宮でもかつては伊奈波神社同様に多くの山車が出された。享和二年（一八〇二）に行われた加納天満宮九百年祭では七台の山車が出されたことから、少なくとも江戸時代後期には山車祭礼が成立していたようである。その後、濃尾地震後の明治三十五年（一九〇二）に行われた千年祭でも山車が出され、絵図によれば名古屋型山車が八台と、踊山車が五台出されていたことが分かる。その中に鞍馬車の姿も見られ、現存するカラクリ人形の収納箱に同年（明治三十五年）の記載があることから、千年祭に合わせた建造されたのではないかと考えられている。ただし、天満宮で保管されている



写真 8-16 鞍馬車

る平太鼓の収納箱に「五丁目」「明治十五年」とあることから、少なくとも囃子は明治初期から本町五丁目で行われていた可能性がある。その後、昭和初期には数台の山車が町内で保管されていたが、鞍馬車以外は全て戦災消失

した。

戦後は境内に飾られるだけで曳き回しは無く、囃子演奏だけが本町五丁目の有志を中心に行われていた。昭和四十年代に囃子を経験した女性（当時は小学生）によれば、曲は「シャギリ」「道行」の二曲があつて、笛・小鼓・大太鼓を大人が担当し、小太鼓は三人一組で小学生が演奏したという。その後、いつしか生演奏は途絶え、テープ音源を放送するようになった。

平成十五年（二〇〇三）の本殿新築に合わせて山車の曳行を復活させることになり、同時に囃子も生演奏で行う運びとなった。当時すでに伝承されていなかったため、岐阜まつりの安宅車（金華地区）に所属する囃子方有志に協力を依頼して「シャギリ」「道行」「人形囃子」を復活させた。このうち「シャギリ」は天満宮に残るテープ音源を元にし、「道行」は安宅車に伝わるものを導入、「人形囃子」は安宅車で囃子の指導をしている後藤氏（能楽師）によって新たに編曲された。「シャギリ」は岐阜まつりで演奏されているものと似ている（譜例5）。道中では「道行」、山車の回転時は「車切」を演奏している。「人形囃子」は「早笛」・「謡」・「舞働」・「謡」という構成になっており、能楽に即しているだけでなく、岐阜周辺の山車文化である「謡の使用」も考慮されている。楽器は笛（能管）・小太鼓（紐締）・平太鼓が用いられ、小太鼓は小中学生が中心で演奏している（写真8-13）。

